

シベリアの風物

長岡半太郎

シベリア鉄道で歐洲に行く途中、つれづれなるにまかせ、鈍りたる鉛筆を揮^{ふる}つて四方山の感想を書くのは一興であつた。汽車旅行は船の上と違い、一室に牢居するのであるから、つまらなく時間を費す。然し白駒隙を過ぐる人間の生涯に時間を浪費するは深く戒むべきである。思いつきの儘^{まま}を赤裸々に書き出したのが次の通りである。科学的専門智識を要するものは、全く削つてあるが、科学者が書いたのであるから、頗^{すこぶ}る風変りの事があるうと思われる。

遼東の豚

安東から奉天にかけ豆や高粱の畑がある。五月初めには、まだ種を蒔くか時かぬの季節であるから、ただ壘^{うね}を作つたばかりである。原野も畑の間に介在している。殊に眼につくのは、放し飼の豚の群である。皆黒いのに驚く。日本には白いのが多いが、ここには見当らない。遼東の豚の話は、今日でも実現されているらしい。この有様であるから、たまたま白豚が生れると珍らしいだろう。然し満洲里を過ぐれば白い大きな豚がいる。彼処で珍らしいものが此処では普通である。かような事はしばしばあるが、誠に漢文読本で読む通りである。記者に告ぐ、ありふれた発明や発見を誇張して紙面を埋むれば、また遼東の豚の謗^{そし}りを免れませぬぞ。

白馬

満洲の野に放牧してある馬や牛の群には、必ず数匹の白いのが混っている。現今日本で白馬を見ることは稀であるが、白牛は更に稀である。此処に白種が多いのは、その種馬と牛とがいるからであらう。然らざれば雪の多いところであるから、自然保護的に、白くなるかとも思われる。

白馬、馬に非すと屁理窟をならべ立てた公孫竜は栗毛の馬ばかり見ていたか、さりとてそのロジックは他の立脚点から得たものか、満蒙の野人にも哲学者が出るかとも疑われる。満蒙より荒涼たるアラビヤの沙漠の一隅に、コーランを著して、数億の信徒をその教に感化したマホメットもあるから、どんな傑物が出ないとも限らない。然し時は恐らくかような人物が出ることを許すまい。白馬と同じく淘汰されて、終に蒙古人の存在は歴史に残るばかりではあるまいか。

駱 駝

満蒙の野には、二つの瘤のある駱駝が群をなし、起きたり跪いたりしている。体は瘦て、毛は長く伸び、食糧不足でもあるかのように見受けられる。胡兒は雙瘤の間に跨り、得意満面、広大無辺な沙漠でも一気に乗越す概を示している。しかしその歩みは遅く、重みに堪えざるかの如く、その貧相な様子は、瘦馬の脊骨が立っているに彷彿としている。川柳に「源左衛門駱駝のやうな馬に乗り」という句の妙を覺らしむる。

近頃歴史家に聞けば、「鉢の木」の事蹟は全くフィクションであるそつだ。

カラヴァン生活

駱駝の一隊を組織して、沙漠を渡るカラヴァンとは少しく趣を異にした生活を、シベリア鉄道でやらなければならぬこととなつた。列車内に食堂車はあるけれども、その料理は何と評してよいか、一言にしてこれを蔽えば、土

百姓料理とでもいつてよからう。油濃いスープと、牛かさくらから判らぬ肉の油揚げ、変な味のするコムポートのよ
うなものばかりで、脊に腹はかえられぬ場合でなければ咽喉を通らず、通つてもむかむかしておくびを催し、よく
も人間がこんなものを終歳喰つておれると思うほどの代物を揃えて、一食三ルーブルや、四ルーブルを召し上げる
のである。それ故シベリヤ旅行には食糧品携帯でカラヴァン生活を営まねばならぬ。

予等の一行十人許りは、奉天とハルビン等で竹籠二つ、柳の粗籠数個を或る人の周旋で揃へ、必要品を盛つて汽
車に乗った。無論この中には皿やナイフ、フォーク、さじまでも含まれている。湯沸し、魔法壇まじ、メタ（固形アル
コホル）その他の器具もあった。

籠を開いて驚いたのはパンの大きいことであった。満洲豆粕の円盤ほどのものである。長く貯えねばならぬ。生憎あいにく
数日間に乾燥してしまつて、ぽーっとなつた。幸いに湯は列車内で得らるるから、リプトン罐をあけて、時に茶を
飲んだ。魔法壇に湯を入れて、茶の葉を少しその中に容れると、自ら茶ができて、数時間温かくなっている。昼飯
夕飯には鰯や牛肉の罐をあけた。また野菜物にはアスパラガスその他のものを喰つた。罐詰めめ味の味は数日喰えば鼻
について困るが、腹は減る、致し方ない。こんなときにはチーズをかじるもよいが、バタは可なり長く保つから、旅
行者は必ず携えるがよい。夏蜜柑、レモン、林檎のような果物は持つて乗るがよい。此のカラヴァン生活を七日間
続けるのだから、シベリア鉄道で旅行するものは甚だ苦しい。もし之が三週間もかかるものならば、容易ならぬこ
とである。予が二十年前にシベリアを往復したときには、御馳走に飽いた験があるが、いつこの状態に回復するか、
カラヴァン生活の必要を、可成速かなりかに撤回してもらいたい。しかし彼れも是も一興と思えば、余り腹は立たぬ。

満蒙の荒野

予が大阪を出たのは五月二日であった。春風に鯉織がひらついていた。新緑は四方の山にしたたるように美しく

見えた。朝鮮を過ぎて鴨緑江の筏を眺めつつ満洲に入ってから、大陸の風光は何となく別天地を映して来た。

奇観と思わるるのは涯確がいしなき野原である。晩春の頃、草枯れ蓬絶えて、一瞥寂寥の感を催した。五十年前、大阪専門学校（三高の前身）に学んだとき、ひどく漢文でいじめられた記憶がある。中にも李華の古戦場を弔う文は殊の外六ヶしかつた。半はすでに忘れたが、これ程愉快に満蒙の野景を記述した文章は他に知らない。その記載する戦場は青海戈壁かへきの辺にあると考えらるる。満蒙の荒野は遠く天山南路、甘肅方面に繋がっているから、記事の相似たることより推せば、矢張り広大無辺な原野を指したのである。文中不審に思った一句を、今なお覚えてゐる。即ち獣走つて群を失うというのである。満蒙に来て見れば、誠に然りしか。李華は自ら目撃して、有りのまゝを描写したに違いない。記事は真に迫っている。こんな広い野原ならば、数百万の軍隊を動かし得る。戦わんかな、骨を砂礫に暴さん。降らんかな、身を夷狄いてきに終えんと書いてある。前の句は軍人の本分、後の句は卑怯千万である。由来唐の人は臆病であつたらしい。白樂天の詩に、徵兵忌避の好例などを臆面なく吟じているので明瞭である。恐る恐る戦っているから、反てかえつたため兵卒を沢山失つたらしい。満蒙の野には、駱駝や牛馬の骨と覚しきものが沿道に見える。現に犬が驢馬を喰っているのを見た。唐代に剽悍ひょうかんな突厥等とつけつと戦つて敗続した後の、累々たる屍さいを豺狼さいろうが平げた状況はやさしく想像さるる。これに対し、詩人は弱音を吐いて、もとこれ春閨夢裡の人などといって歎息したこともある。人間が生存競争をやっている間は致方があるまい。満蒙のような開けない土地に這入つては、命は安くなる。病気に罹つては医薬の供給が殆ど杜絶している。行き倒れとなれば、瘴猛な蒙古犬が腐らぬうちに浄化してしまふ。やがて頭蓋骨は秋虫の巢となり、月夜には単調な御経をよもすがら唱えてくれる。年が経てば、砂が溜つて、尾花桔梗は眼や鼻の孔から芽を出し、自然と花を手向けてくれる。実に面白い鉄道の環境である。

出塞詩にも、満蒙の野に連つた原野の状況が謳つてある。平沙万里人煙を絶つとか、沙漠の中で明月の晩、遠征した軍隊が、首を回して、望郷の念を催したとか、多くは故郷いかに恋しかるらんでもいう句調が始終表わされ

である。僅々十日に足らぬ安樂な旅行でも、多少こんな気持ちがあるから、二十歳で辺疆を成り、白髪になつて故郷に帰つたような兵卒の身になれば、人情の然らしむるところであろう。あなたがち唐人の文弱を笑つ訳ではない。

滿蒙の野原を記載するには、廣大無辺に更に形容詞を加えねばならぬ。それは烈しく寒いことである。岑參がここから数百里の南に位する崑崙山附近のことを書いて、涼秋八月肅関の道、北風吹き絶つ天山の草と謳つたので判る。今度の旅行でも、端午の時節に、原野に残る吹き寄せの雪は脛を没するほどであった。これ等が諸所に斑点を現わしている。シベリアに入りて高地に近づけば、山は雪に埋れて、白皚々とした頂きを青空に露出している。朝は屋根から尺余の氷柱がぶらさがっている。この寒さに堪えかねて草はまだ枯れている。結局春と夏とは殆ど同時に來ることを示している。三年前、八月上旬、シベリア鉄道を利用して歐洲に行つたときは花盛りであつた。實際を語りて「春來ても鶯鳴かぬシベリアの野辺にさきはふ七草の花」と字数を揃えて見たが、今度は五月初めに「見る限り尾花かるかや枯れはてて春のけはひを知るよしもなし」であつた。

二十年前、一月初めに通過したとき、雪より他に見るものはなく無聊に苦しんだ。その時興安嶺で零下四十四度を示し、海拉爾では髭は勿論睫毛まで白く凍つたことがあつた。それゆえ表はどんな貧乏人でも用意せねば生命が保たれない。多くは羊の皮で作つて、内側に毛が付いている。この状態を日本と対照すれば、日本はパラダイスといつても褒め過ぎはしない。

この曠野を利用する人口過剰の融通策やら、食糧不足の補充策などは茲に記さぬ。予の如きものが容喙すべきことでないと思つから。

蒙古に縁ある蘇武、李陵、王昭君

漢代の歴史で光輝を放つのは蘇武の節である。十九年間バイカル附近の朔北の野で、羊を牧して漢節を守つた。

その青史に赫々たるは当然である。想うにこの辺の状況は、今も昔も余り変りはなからう。原始的な矮屋に孤棲して、半歳は雪に埋まり、鼠色した雪空を眺めて、長安の繁華を恋しく思っていたであろう。帰るとき全く白髪になっていたのも自然の数である。

これに反して、匈奴を退治するに妙を得た李広の後嗣であった李陵は、胡人と沙漠に転戦して力尽き、とうとう敵に降り、汚名を残した。李陵が住んでいたところもこんな処であったろう。降将は可なりの待遇を受けていたに拘らず、その蘇武に与えた手紙を読めば、悲惨涕の下るを覚えぬ。因果応報当然である。その後唐の人がただ竜城の飛将をしてあらしめば、胡馬をして陰山を度らしめずとまで仰めた名将の後に、この醜児を出したのは遺憾千万である。或る詩人が、子孫のために馬牛となること勿れと詠じたのもいわれなきにあらず。

ここに蘇武は孤棲したと書いたが、李陵の手紙の結尾に、足下胤子無恙、幸勿為念という句があったように、かすかに覚えている。そうすると孤棲は間違いであつたらう。女の相朋があつたに違いない。これも奇縁である。蘇武が漢に帰ってから、その子（名は通国）の親思いはどんなであつたらう。なんだか石童丸の前提でもあるかの如く感ずる。人固より木石にあらず、蘇武もまた折にふれ、北を望みて通国を呼び、痛哭したではあるまいか。悲劇か喜劇か。学究にはさっぱり判らない。

詩人は窮して然る後に詩に巧なりとは、東西の論者が均く唱道するところである。蘇武、李陵が窮境に陥り、五言詩を創作したのは、この講論を裏書きしたものである。朔風は肌を刺し、砂塵は空を蔽う、穹廬を暖むる牛糞の余燼微にして、手足は鉄の如く冷え、まどろまんとして夢を結ばず、転た愁に沈んでいるとき、胡笳一曲、断腸の声を伝つれば、遠鼠の孤客心肝沸騰して、望郷の思禁する能わず、常人と雖も悲歌慷慨せざるを得ない。況や文辞に富める人においてをや。その一慮一念、凝って詩となるは論を俟たない。

長恨歌の漢宮佳麗三千人とは、盛唐のことである。実の漢代には幾人いたか判らぬが、その内の明眸皓齒として、

詩に詠じ、画に描かれ、後世に伝わる王昭君が、一旦画工に誤られ、妖艶の姿を君王に背けて蒙古入りをした遺蹟は、矢張り此の如き原野の一隅であつたらう。憫れなるかや王昭君。昨は漢宮の人、今は胡地の妾となり、カボチャ畑に瓜一つ、万緑叢中紅一点のコントラストより甚だしい蛮婦の群に絶大美人。なおはげしきは、百工の美を尽した漢宮を、離れてテントの中の佗住居。佳肴珍羞に飽きたる口に、腥い羊の肉の羹や、野びる、にんにく、つくづくし、塩気の足らぬあえもので、やつれし顔に砂ほこり、雪解の水に洗い出す、紅頬玉膚むごたらし。美人薄命黄土に化し、その幽魂は積裏に迷ふことすでに二千年。馬嵬坡下泥途の中に埋まる楊貴妃と宿縁相距ること幾何ぞ。

水清く魚棲むバイカルの霊湖

シベリア鉄道の名勝がバイカル湖であることには、衆人皆一致している。五月八日、湖水に流れ込むセレンガ河を左にして、汽車は楊柳と白樺の林の間を突貫して走つた。河水は半ば氷結して、連山雪を戴いていた。午後四時半ごろ一望無砂。全く氷に鎖された湖水の畔に出た。「バイカルだ」と乗客は声を揃えて叫んだ。進むに従つて眼界開豁、湖水は全面凍つている。しかも凍つた上に雪が積んでいる。湖水は図で見ると新月の形をなしているけれども、余り広いので、地平線からその全形を断定し難かつた。南端から北端に跨る線は、東京から岡山までより長く、深さも千四百メートルに達する処があり、世界有数の深い湖である。水が澄みきつてゐることは夏湖畔を過ぐれば直に判る。実に霊湖である。水清ければ魚棲まずとは、古人のいつた虚言である。この霊湖には魚が沢山いる。結氷した湖上には櫂を曳くものがあつた。また氷に穴を穿ちて釣を垂れているものがここかしこに見受けられた。その遺した足蹟が点々雪の上に印されてある。遠くから見れば、雪中犬が歩いた痕跡のようで、可笑しく思われた。漁夫は裘の装束でソヴェート独特の毛帽を冠り、氷上にしゃがんで頻りに糸をあやつつてゐるようでも、糸までははつきり見えなんだ。呑気なのはこの辺の人間の性分であるようだから、涓浜で釣をした太公望の亜流であるう。

経綸の策を懐いているかどうかは判らぬが、釣れますかなどと側による文王は、現代ではかかる儼隙に見当るまい。こんなことは漢学者が好んで説くところで、お伽噺の片割れのようにスピード時代には聞える。

深山大沢竜蛇を生ず。将来この靈境に大人物が生れぬともいわれぬ。見よチンギスカンは遙か東南の原野の産ではないか。欧亜を席卷して一時大帝国を経営したチムールもまたこれに似ている。愛親覺羅の興った処も、この荒野の続きである。眼前に広大無辺な原野を控えておれば、気は大きくなる。舞台も大きくなる。従つてそのなすところもまた偉大である。我邦には悲しいことには、これに比較すべき広野もなく、大人物も生れなかつた。四方環海の国であつて、大陸と境を接していなかったのは、その一原因であるかも知れぬが、徳川時代の鎖国は、消極主義を鼓吹し、その発展を妨げた。将来はどうであるか判らぬが、国民性はこせついている。同胞間の小競合に気を廻し、勢力範圍の至つて狭い仕事に没頭して、終に内輪揉めで焦慮する小人物が多い。その事業の大小を比較すれば、琵琶湖の水量とバイカルのそれとの差がある。我邦は風光明媚、天然の大盆栽のようであるけれども、これが却つて人心を小ならしめ、事業を萎縮せしむる原因ではなからうかと、徐ろに感慨に沈んでいたところ、首を上げて西を望めば夕陽將に没せんとして、湖水を圍繞する数多の秀峰は光を浴び、皚白なる頂きは薄桃色に彩られ、恰もアルプスの夕暮に似ていた。この雄大なる風光は、恐らく靈湖の特徴であろう。しかしてバイカル湖は、ラク・レマン（アルプスに近いゼネヴァ市に面する湖水）と相似形であることは、科学上頗る面白い。

（昭和六年（一九三一）六月「大阪朝日新聞」所載）

• 長岡半太郎著『随筆』（改造社、一九三六年十一月）所収。

• PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

• 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。

• PDF化には L^AT_EX 2_ε でタイプセットティングを行い、dvipdfmx を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/science1ib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。